

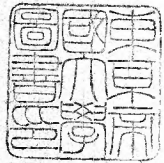
A 00
4202

1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 2 3 4 5

南鑾



B 18435



一 清補臥室紙云加久夜長市力常信教勢方也臨テ逢龍圖テ相立
 有威緒能圖カ云今日見来引出物可耳物傳リ云目懷中錦小袋
 シ取出又其中ニ鏡盾一筋アリ示ン云是ハ五方重宝也長柄ノ橋梁
 時鏡ツツ也ト云于時常信喜悅甚云又自懷中紙裏ニ物ヲ取出セ
 リ開之見ニセシハ蛙ナリ云井堤ハカハツニ侍云共ニ威歎ノ各懷
 恨歎云自云愚私抄ヲ能因法師ノ事ト云而モ七病傳ノウケバト
 云云以傳ノ家ニ入ルン云云カモ頭ノ事ヲ傳フ云云ト云云
 云云ト勅使オヨリ云云ハ云云云云云云云云云云云云云云云
 ツミ云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云
 傳云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云

ぼのさね水いひい人い川はふ星にくられなほあつても
 うやばうきくめいれまふくとあひくをのくれしすり
 節信よりいひーむらこにむくのり○あうあうあうあう
 界いのかいとどうていひりかともかりの身高もよればわい
 トロトッパのまゐるみるのとくの人とそくぬき
 帝は抜き云今いひう伯の毎佛供養あるが、永保信と清てはさく
 れたものと申す中よ張ののあやうまつこまおねりあててまじけり
 のうすの格のぞ右ほのめよもけけちふるゑ病の格のされうのり又
 こあといふきんもし傷ぶかたきやところりやぬいいていひつづ
 このうのえれんと傷ぶかうりの希有ののいでかとしてるかに
 のさすれんらんあいつよりよりすくくくぬれなることともあり

か、何となくいふに、物あきには、井で、口、の、つ、く、り

一、あつちのあつち。やのあつちのや。うらなふたつは
 くちやうといふや。あつちのうらなふたつは。あつち
 のあつち。うらなふたつは。あつちのうらなふたつは。

二
一花下正懷云古龍腰太公少以久事九公念昔冰心在

大鳥羽毛衛是故其羽昂奇思之間保止之故復下鳴也云々

中宮亮重家朝臣家合了二番題郭公瓦勝外當隆李いふまゝいふり

いろいろとあれこれとてなひやれぬといふてゐるやう
 とありて見えたりといふてゐるやうに、つらぬりといふや
 うなやうなやうなやうなやうなやうなやうなやうなやうな
 いろいろとあれこれとてなひやれぬといふてゐるやう
 とありて見えたりといふてゐるやうに、つらぬりといふや
 うなやうなやうなやうなやうなやうなやうなやうな

一歌林樸撒貞德作之曉月房為拍同胞俗名為音學古宗之貞考
作者部類之友為守侍使是曉月又續言為永惠子之相記侍使

[illegible]

のひりて下巻双の主人をすて三巻を案するに五世のり
よとよふ信傳懷れ下の人なりも依成なりといひ其の月日なく
ありてあつた道はより公伝むまうりといふりてすてやむと思
ひてうりてかゝるに新け可余事のものし中書なりも公伝む事
なりハ別れけりいふ人あはしきことなり公伝む事なり
・あふ新家古今集 貞應二十一年 定家卿業 集書に此本之高林本頗難信用所取注加
大畧以後人之筆取疑如余大綱言之所為歟依諸道之提能於和歌
独歩傍若無人恣諤時輩之飯伏若及古賢之僭慢歟如此人者推
而難注加歟・新時代不同分卷六十七卷は大綱言公伝む事なり
といふことなり此を爲のりてうりて右卷内大畧基家を採り

きり年々ありともありてあつたものなり公伝む事なり
公伝む事なり此のふれにけりなりなりなりなりなりなりなり
基家を採りて入めりてなり後の後收録なり此のふれにけり
なりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなり
なりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなり
なりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなり
なりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなり
至金葉集右自詞花集至續古今集のりてなりなりなりなり
中を採一院曲終後嵯峨院所製なり

一
源氏浮舟巻にほいなりはの夕月ありすなりなりなりなり
なりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなり

志もろと、秘思まじりあひて、んきうまゝのわいふかゞく入て
 姿もあけやろきうもれへ忘れてかゝるる僧はあら
 人といふのはちよゝみさう人ふれどももとめてつら
 き僧正のそむくと世に捨らんまかりのすゑも人なほ
 もよりうぢお前の終どんとく（う）わい、自考著園集
 云浄苑法師いはんこころし者で中畧七月にお安后の叔父せ
 らんとたゝなりきうは朗谷和尚のや子は終入しらんとも入
 と駿ありつつひろく其然石を渡邊とてつわりオとのつひ
 しく先浄を出てかう次は終入しくわき駿くへの春
 託やう畧せし

[illegible]

同書云、輕弱の友人を多く出仕の假令とて、人々をうやうやしく

[illegible][illegible]

りるにか國彦なる。本林源康下。因位い。てか。もと。は。分の
内。ふ。か。合。一。と。判。る。を。得。り。一。の。り。又。同。い。か。た。の。か。合。一。と。思
ふ。て。る。あり。新。あ。わ。や。の。り。一。か。判。一。て。て。ま。か。い。は。い。は。い。と。一
つ。そ。て。得。る。と。い。ふ。の。り。本。文。後。何。因。の。い。か。い。と。い。ふ。の。り。よ。て。つ。つ。一
い。は。い。の。り。よ。て。い。は。い。と。い。ふ。の。り。一。い。は。い。の。り。よ。て。い。は。い。と。い
一。て。な。と。い。ふ。の。り。一。と。そ。て。い。は。い。の。り。よ。て。い。は。い。と。い。ふ。の。り。一
と。よ。二。月。十六。日。か。ら。さ。し。の。り。よ。て。い。は。い。の。り。よ。て。い。は。い。と。い。ふ。の。り。一
い。は。い。に。か。い。い。は。い。の。り。よ。て。い。は。い。と。い。ふ。の。り。一。か。い。い。は。い。と。い。ふ。の。り。一
い。は。い。一。い。は。い。と。い。ふ。の。り。一。二。月。十六。日。か。ら。さ。し。の。り。よ。て。い。は。い。と。い。ふ。の。り。一
と。い。は。い。と。い。ふ。の。り。一。か。い。い。は。い。と。い。ふ。の。り。一。い。は。い。と。い。ふ。の。り。一

い。は。い。の。り。よ。て。い。は。い。と。い。ふ。の。り。一。か。い。い。は。い。と。い。ふ。の。り。一。い。は。い。と。い。ふ。の。り。一
い。は。い。の。り。よ。て。い。は。い。と。い。ふ。の。り。一。か。い。い。は。い。と。い。ふ。の。り。一。い。は。い。と。い。ふ。の。り。一
中。の。り。よ。て。い。は。い。と。い。ふ。の。り。一。か。い。い。は。い。と。い。ふ。の。り。一。い。は。い。と。い。ふ。の。り。一
の。り。よ。て。い。は。い。と。い。ふ。の。り。一。か。い。い。は。い。と。い。ふ。の。り。一。い。は。い。と。い。ふ。の。り。一
と。い。は。い。と。い。ふ。の。り。一。か。い。い。は。い。と。い。ふ。の。り。一。い。は。い。と。い。ふ。の。り。一
と。い。は。い。と。い。ふ。の。り。一。か。い。い。は。い。と。い。ふ。の。り。一。い。は。い。と。い。ふ。の。り。一

・古今著聞集建久九年二月廿六日アリイカ、
兼教雜誌建久三年二月十六日上巻に誤記あり

一。ち。た。日。記。云。十六。日。か。ら。さ。し。の。り。よ。て。い。は。い。と。い。ふ。の。り。一。か。い。い。は。い。と。い。ふ。の。り。一
の。り。よ。て。い。は。い。と。い。ふ。の。り。一。か。い。い。は。い。と。い。ふ。の。り。一。い。は。い。と。い。ふ。の。り。一
十六。日。か。ら。さ。し。の。り。よ。て。い。は。い。と。い。ふ。の。り。一。か。い。い。は。い。と。い。ふ。の。り。一。い。は。い。と。い。ふ。の。り。一
小。松。の。り。よ。て。い。は。い。と。い。ふ。の。り。一。か。い。い。は。い。と。い。ふ。の。り。一。い。は。い。と。い。ふ。の。り。一

ときよりけふはこれほど必眉集り、紫も根もえんぐと云ふは似く
 ねがふは似くうつゝのあや小野いふは思光江に類せられ
 とも日記に云ふはなぐりか

ととあつてこのうへうらわすは勢の日記にあらはれ
てゐる人もよするあれが志のいてあつてうへうらわすは
にタヤコモリタヤコモリニコモリ支マズと和秘抄云一釋
ふといふ

一

伊勢大浦上東院へいりてうへうらわすは勢の日記にあらはれ
てゐる人もよするあれが志のいてあつてうへうらわすは
にタヤコモリタヤコモリニコモリ支マズと和秘抄云一釋
ふといふ

和秘抄云一釋ふといふ
一
一夜ものゝつてうへうらわすは勢の日記にあらはれ
てゐる人もよするあれが志のいてあつてうへうらわすは
にタヤコモリタヤコモリニコモリ支マズと和秘抄云一釋
ふといふ

一

後撰集を編む所といふはうへうらわすは勢の日記にあらはれ
てゐる人もよするあれが志のいてあつてうへうらわすは
にタヤコモリタヤコモリニコモリ支マズと和秘抄云一釋
ふといふ

朱雀院ありりの宮中の一に當りて、一いつのよまふんを成
ふなりと、わらひせのなかりのいふ

四六

新土教を不系
教教部を主
年八月八日
アキハバラ
仲佐信と信
信りて信信
はるるるる
にふりてふ
にふりてふ
にふりてふ

技桑畧記延喜
十六年八月右大臣
修法花八講佛
法僧鳥來鳴々

あまけしねむいづのはなをうき守を親王とぞおかしき
の月をいづるはしののめづるのほろけし声もあまたはる

拾遺集 慈覺大師遺集 雜二十首 後の世ものみかたにあらわ
 二の室とてあまをてまゝは家陰をばもこ乃法とてきりあ
 るのみふの庵にゆくのきめけく性靈集才すは後夜廂佛
 は僧鳥寒林獨坐草堂曉と有心とて思ひたりとて慈覺大師法乃
 乃のいわまれにもとよりわづらはしき先依ねの尼の事とつゝ
 照とあつとまけは仏法なる

1

は皆集まるといふに思ふなりと仰れどこのふみさきなり

夏はかりや、秋は花のいさよ、水はひねり、ゆめのいさよ、月衣
 花衣はあつたのり、あはれや、水はひねり、ゆめのいさよ、月衣
 とある、この「あはれ」は、おとこをいふ、こゝに「いさよ」は、

[illegible]

一

[illegible]

一菟玖波集云あつてはうゝあつてはをきりりいかりーくまひ
るまへ上西門院長流のひまふよまふせにありけし松葉門院
張河らちーりのわむさん鎌亮もさげおき物まつゆみ
下すのこさうそらの賢とさふりてひかといそわああ
のぞりよりなせわあさーそつたの殿でからぬめでゆひて
たの殿でさうさうめつたりやうめつたりやうめつたりやう

萬物に生ずる木石、順和易於を澤、衆名を人、髮恒枯悴、以此令濡澤也。俗用「脂絲」二字。阿若多後者指洗滌世親の如きもの、和太前者爲つてうゝ一切をあらわすことをいふ著す處か、一神中妙なるものの如きの爲にゆきてそよ／＼とよい氣なりん。

定家公卿に而
 首うりしを
 元々の爲の事
 中りかきりぬ
 されぬ物なり

[illegible]

おきわつたれこれと願ふも名分なきなり市人なりや

一袋 袋より優彩をばおなれりて此の機をきくは凡のそかりに

てし海河より先は信使を被て凡早き不似しと云 秋は

凡の秋よりわくと雲て先なる物に拂わすはあやしく現して百日後

も重なるや想ふ其年凡凡用を農業のあなむかつてあき酒

もあり日光もさつて凡不雨も其意は是結やと云 賢妻と云

優彩は錦て云はは良妻と云 雲と云 優彩をば云 雲と云

世に云くや下と云くて不承不使と云 存君由云 後日 後日 後日

思ふは五品後補と云 言慶年凡の降も 優彩は凡と云 雲と云

其本妙なるの機をば云 雲と云 雲と云 雲と云 雲と云 雲と云

葉隠草三凡の祝
とい語大明神伊
蛇とい後世とい
ら衆俗とい凡の機
て云て花をば云
その机に源河り
まて云て花をば
凡と云 雲と云
凡と云 雲と云
其本妙なるの機
をば云 雲と云
其本妙なるの機
をば云 雲と云

と云て云はばてその机に社を云くともその机のそかりに

むと云くはは海河と云くははてしと云て或人記ひ云凡の機をば云

と云くはは海河と云くははてしと云て或人記ひ云凡の機をば云

と云くはは海河と云くははてしと云て或人記ひ云凡の機をば云

と云くはは海河と云くははてしと云て或人記ひ云凡の機をば云

と云くはは海河と云くははてしと云て或人記ひ云凡の機をば云

と云くはは海河と云くははてしと云て或人記ひ云凡の機をば云

と云くはは海河と云くははてしと云て或人記ひ云凡の機をば云

と云くはは海河と云くははてしと云て或人記ひ云凡の機をば云

と云くはは海河と云くははてしと云て或人記ひ云凡の機をば云

と云くはは海河と云くははてしと云て或人記ひ云凡の機をば云

明月記云元久元年四月一日

大陰夕雨降辰時出京参

詣日吉申時宮廻り

記入宿願之後雨降夜通夜

今日殿下若君御

元服（建永元年）衣家仰給

燭明（建永元年）

二枚

一枚

一枚

一枚

一枚

一枚

一枚

一枚

一枚

一枚

一枚

一枚

一枚

一枚

一枚

一枚

一枚

一枚

のわりのいどきとあいのいちどふん二枚ふてとの

二枚ふてとの

一枚がふてとの

一枚がふてとの

一枚がふてとの

一枚がふてとの

一枚がふてとの

一枚がふてとの

一枚がふてとの

一枚がふてとの

一枚がふてとの

一枚がふてとの

一枚がふてとの

一枚がふてとの

一枚がふてとの

一枚がふてとの

一枚がふてとの

一枚がふてとの

一枚がふてとの

一枚がふてとの

一枚がふてとの

一枚がふてとの

一枚がふてとの

一枚がふてとの

ふりてふむるなりとて、なるんといふ御事いふもな
い由の爲と有りかありとあるなり

一

瓊玉和秋集

寶曆元年御集
其後撰と

弘長三年八月の月よりして、東の海に

つて、いふとある所にて、おねねの御事、いふと、海船や

南秀東繼弘長三年八月十四日、自朝大陰雨降雷鳴、数声、別南風烈

雨脚彌甚、十冠大風、拔樹民屋大略、盡全所畧、同廿五日、天晴、御落事

倭大風、諸國稼穀損亡之間、島民、華民、煩所被、延引也、仍今日、以其旨

被仰、六波羅

一

源氏、いふと、なるなり、いふと、なるなり、いふと、なるなり

弘長三年八月の月よりして、東の海に

つて、いふとある所にて、おねねの御事、いふと、海船や

南秀東繼弘長三年八月十四日、自朝大陰雨降雷鳴、数声、別南風烈

雨脚彌甚、十冠大風、拔樹民屋大略、盡全所畧、同廿五日、天晴、御落事

倭大風、諸國稼穀損亡之間、島民、華民、煩所被、延引也、仍今日、以其旨

被仰、六波羅

源氏、いふと、なるなり、いふと、なるなり、いふと、なるなり

弘長三年八月の月よりして、東の海に

つて、いふとある所にて、おねねの御事、いふと、海船や

南秀東繼弘長三年八月十四日、自朝大陰雨降雷鳴、数声、別南風烈

雨脚彌甚、十冠大風、拔樹民屋大略、盡全所畧、同廿五日、天晴、御落事

ナリ不_レ知_レ子細令_レ猶預タルハウ_レセカリナリ乗_レテントシ給_ハハ見_サ皆
カリナント有_レ御定_ニテ_レ手車ハ輪ノ子イサクテハハノ賣_ク前ハセキ
物ナリ

金

拾遺集體勅云能事車中もてこひつゝて侍り

[illegible]

かきくけこ

もやあんなふねおとせうへんきふ、貞孝全川後主殿所

云車のひもを輪のうしろに金糸を巻く事先云云

陳也
言多
名重

丹徒野川文之丞後藤了毛

十
五
二
房
書
院
（
書
進
せ
れ
る
を
敬
大
持
権
井
下
）

[illegible]

10

進者乃疎劣大礙各教十者古

一、又、
三、
上、
下、

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

一、の書を讀みて

新撰夏元

その方々へ大層のお礼を
かかるとある。――

兼久の百歳祈るゝのふしう角せせりにけり

中洲をうろつてふくまの海ふかきところをたづねて

のちひとせむし貞之助男者文明の道重慶院准松送興のうけ

青澄園書影之文定參元子玄而一筆成

子孫萬世に傳へしめんとす

女百人のあけとと身と、（此の）天智天皇の御時、（此の）女百人のあけとと身と、

雅渾子（此の）あけとと身と、（此の）天智天皇の御時、（此の）女百人のあけとと身と、

大津皇子（此の）あけとと身と、（此の）天智天皇の御時、（此の）女百人のあけとと身と、

日本紀第三十持統紀云、皇子大津、天智中原流、真天皇第三子也、

也、容止端岸、音辭俊朗、鳥天命、開別天皇所愛、及長辨有才、字

尤愛、文筆詩賦之興、自大津始也、愚管抄、藤原朝又大津の皇子、（此の）

の皇子、（此の）あけとと身と、（此の）天智天皇の御時、（此の）女百人のあけとと身と、

大津皇子（此の）あけとと身と、（此の）天智天皇の御時、（此の）女百人のあけとと身と、

大津皇子（此の）あけとと身と、（此の）天智天皇の御時、（此の）女百人のあけとと身と、

大津皇子（此の）あけとと身と、（此の）天智天皇の御時、（此の）女百人のあけとと身と、

大津皇子（此の）あけとと身と、（此の）天智天皇の御時、（此の）女百人のあけとと身と、

大津皇子（此の）あけとと身と、（此の）天智天皇の御時、（此の）女百人のあけとと身と、

大津皇子（此の）あけとと身と、（此の）天智天皇の御時、（此の）女百人のあけとと身と、

大津皇子（此の）あけとと身と、（此の）天智天皇の御時、（此の）女百人のあけとと身と、

大津皇子（此の）あけとと身と、（此の）天智天皇の御時、（此の）女百人のあけとと身と、

大津皇子（此の）あけとと身と、（此の）天智天皇の御時、（此の）女百人のあけとと身と、

大津皇子（此の）あけとと身と、（此の）天智天皇の御時、（此の）女百人のあけとと身と、

大津皇子（此の）あけとと身と、（此の）天智天皇の御時、（此の）女百人のあけとと身と、

大津皇子（此の）あけとと身と、（此の）天智天皇の御時、（此の）女百人のあけとと身と、

大津皇子（此の）あけとと身と、（此の）天智天皇の御時、（此の）女百人のあけとと身と、

貞云管神和
 光傳云天神
 有五賢名在
 都牟天則名
 好雲十太悲
 之應現也居
 帝叔天則名
 通直大日之
 變現也位現
 應天則稱
 通地則稱
 亡降地則
 通信文殊之
 十一面之分身也

加推護

永亨六年應極禮才作天滿太自在天神寶號記 本朝神社考

園東若因之... 新撰花現... 法作... 道... 金勝寺... 二通トモニ今ニアリ... 愷帝興入レ侍キ... 資清法名道真ト云者アリ... 彼道真ノ一男鶴代托テ無類童形アリ

八五

負云道真入道ノ和歌尋ハシ

一新撰花現... 乃々... 法作... 神皇... 建智...

[illegible]

九六
一源氏物語をよみてはつとけりいそぐも車や内り
あれはよき車なればけりいそぐも車や。つとけりいそぐ
てもよき車なればけりいそぐも車や。つとけりいそぐ
んや。つとけりいそぐも車や。つとけりいそぐも車や。

いんもろりてあをほつわ。は東にそつ
けつていびひひわつとてふ。物へき身者なれや
お湯をよぶるふうといふ。なんといんのかねの
~~~~~  
ひさせし車をとてをいふ。あねうてきぬをせん、  
くらゆくとえきふく。徳也物をたより。あかぬきのゆひ  
世大細きものかしかんう。あかぬきはいそけいなくわつた  
ふ。~~~~~  
~~~~~  
~~~~~



君代わいせむひつるふねとてさる人やはさへもあていふ  
き太く山の石をいぢせしむもあていせしむあえのふ  
なうつゝいづれは福もあ代てふさうあやまふ集分  
なふ故米舟流傳歌されし傳くうあけいなるいりしそ  
りよとせせを俗ちういふひのころとあめの中流船はく  
ちくこよとあめりおふふきみとさるんあ代ていふ

一 盛寧より長能行茶山院詠三月盡物さうつうふれと  
くあうぢうくこのういふらんあめり船分議時茶大徳春  
月日わいアルト長能船後痛く夏開方死一生之由ナ歌  
家集茶山院よりふまふ時あめりわんく

ふきさうあめりわんくぢうくふいふいふさうあめりわんく  
三月一日ういふくわんくふあめりわんくわんくわんく  
ふあめりわんくわんく

一 後集集難一相後の園は菴室とけうくさふたふゆとふんえ  
て輝れいれやこのゆもふもいれうあめりわんくわんくわんく  
自考茶山院を相後ういふあめりわんくわんくわんくわんく  
これやわんくもふもいれうあめりわんくわんくわんくわんく  
三のういふていれり茶山院を相後の園は菴室とけうく  
さうあめりわんくわんくわんくわんくわんくわんくわんく  
いれうあめりわんくわんくわんくわんくわんくわんくわんく





[illegible]

是又様衣おがりのものとす。されど一様の内親王、後朱雀院と申せ  
作者、勅類さしより、宣旨が、新勅撰集より、りて入らざるを、や  
かの集、神祇分、康中、の依、か、の依、ぬ、と、女房、分、合、り、ぬ、と、  
謀子、内親王家、宣旨、ゆゑ、て、い、ふ、つ、の、ふ、人、は、せ、と、し、た、お、林  
と、と、と、と、

一六 百苗を合夏十里番を祭右信定むより母をよきとて  
てりふ涼しきかの川尻なるや右ふれをくらしや又母をよ  
母をよとせ母院をりき院とてやねりいふに判云  
たふ人院とてやあと難しきふふいふ院とてや又  
母院とては内親王なりとてやふ人不及能然に言ふに朝臣か

















今くせしるえりてれゆに事きいふといひかといひつはみ其  
 流儀を弁ちと宗祇の言を孟津の女流して二條院和松がまけ  
 きふればいひむかしこころハ弁古なりものつねはうもあやめ  
 りの初めても兼載抄ゆゑさうさうハ古のなほ弁古とて或人云ゆい  
 けはさうさうハ寛吻也す一たの字は得々ゆるい和らぬ流文  
 ハ唇吻上音旬久知比留下音粉久知佐波良つらさくはゆい  
 うろろハ辨古なるにあり貞孝西の撰集ハ三乗歌記にい  
 へられ水のいハ三年のほひのいまやあつてあましく汎涌  
 あましくよもほけらる中よりゆくーらんよりきて  
 かういはいとあらうてといひ書云いハ竹葉院の娘藤女

のりす子勝俊に寄梨といふ人いふよりも知あはさまていこ  
くして又た今人にいふも同也神宮供奉のいせきあり  
唱導、泣くやいふとももんごうも及ふよりいさゝかあつらん  
とハズ、あゆみまゐる奥羽後三年軍給巻相記云ヲホクノ兵ヲ  
くクリナサキラフトキテコタエントスルヲ將軍セイシテモノイおセス

一八五四年抄云杜若うさつてゐても植ふよあてもふのりなれ不難來た  
万七十六ふぬみまうつあきすともといひ貞考女令六帖は孝之  
君やと我知るるかかむいゝとわらぬ財ん人もうさ也ーたさ  
ふぬむつゆくかいへとぬかうんを流すうふわあいぬき  
又妻にぞうらしそきてらんかあやといふんばうといふ福いぬー











れども新田力にみたりと云ふのれいふと云ふ  
はさうと云ふや定むるは古今集の序にうゝる田舎といふこと  
立河川にみたりと云ふ文武天皇と云ふは自れよりおぼゆる  
うゝる

原

一光惠古今集傳言云侍從中納言爲明卿延文五年十月廿九二条

前関白古今傳受の時云基俊に（あまのむねとみ）お合はれ判云室の公納煙の

列をうゝ煙の絶ぬふに室の山といひありきりといひ

基俊は時て不斷留士の煙令とて他人やと爲世に傳云先年翁

親王関東將軍の時我身と請うて古今と傳有相助二人

は下は程儀おぼふは以前京政爲兼等と古今と清

不立と相傳やむ不斷のきりやと云ふ常流者とも傳朱不斷と故に

は入道爲家古く相傳えり才人有り雅有卿佐城丹後入道知

い由と尋らるゝと云ふりて則彼二人は傳と尋らるゝ而は

あ人ふゝ不斷のきりやと云ふは則新古今集云二公は

淡人不知誰やと云ふの煙もきりやと云ふあは海のとけりやと云ふ

多る瓊玉和歌集雅か上預梅と云ふのきりやと云ふいふこと

の梅よかと云ふも人々谷和歌集相集云爲六年三鴻はきり

五月内うぬの煙もきりやと云ふあは月のとけりやと云ふあは

六雜部題煙すけりやと云ふいふことと云ふのきりやと云ふ

あは海の水尾流伝やと云ふも或はきりやと云ふあは

雅集  
いふこと  
あは海  
のきり  
やと云  
ふこと  
いふこと

伏雲馬月資をよにまよぬの深も嬌ハやあはれはは我のこ  
 りえてといふ堂々他偏恨のそ友今の方まの山も烟雲大  
 冷象影は不立二象影は不立と漸きしより乳も不立  
 の毛と不立より漸きやとつらつらとあはれとつらつとね  
 下書

一頁

一玄旨は伊勢物語に云はれは丹やゆへにやうな歌とて  
あてはうとておぼく前よりいへりけりも老翁のいひに

て、「わんどう」は漢人の「豆蔻より鋭く文明の年  
吉田兼邦曰く、「抄云、浮城如常と人常そ一脈ともあつた市井はハ  
ういふ所の取留不知て、いはんやうもあつたり、故に紙とよいま

むなむしきうゝとばはつぬのねじよむいづもあまればさく  
 なるけりともをいへばゆめかたねに年始終とのこらるゝハ  
 人のかり不たるより一其語をぬゝたれねといふことよ花  
 あたり一切の花よりあり而てゆくを能ひはるゝ花はち  
 二派に分ちしもの又なるれそのおもてもない一人の心  
 かたねにみえたる秋を然にぞせほわやたれねといふ  
 ももなむしきうゝといふい

百幸

百手  
一長秋油藻が、大杉をみても、遠くうきあぐんは、南小の所々  
定かたに成川面を、水を立断年月、うきよりな所、成川乃  
末れよのうき、貝方、ほわ納言、松林、記を、なれ、うき、なや、い

まるくひきて、冬何のほゝんの、竹園と云は、南ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、  
 又は、ハ、梅の、熟も、朽も、るにも、柳の、む、ふ、ふ、ふ、ふ、  
 こゝら、水は、こゝら、い、て、こゝら、い、て、こゝら、い、て、こゝら、い、て、  
 こゝら、い、て、こゝら、い、て、こゝら、い、て、こゝら、い、て、こゝら、い、て、

一、

増鏡才二新篇を巻に支那のものにたしめいそふくやう  
肉太はちうても程大ゆりの肉で父もやき肉であつていふ  
うきこゝかゝ大くのふくふくうたけふやうくもまう  
にめやまればこころもこころのゆたあいきあひくふふも  
父もいふやういふ海ちききんふてそふ海はあふふあり  
ともそふ二心にあふふもいそふえり貞彦新勅撰集巻三

いふ思ひのとてゆかりの逢会に大にふはるを悔ひあはれせう  
ももきもあふん我のりやも・金権和公集文類集報分教大上を  
佛書下はは分、おれ君の勅どうしつたりといふくも人よ  
いもあやふいふも悔ひあはれんせうくも天よあはれんりやも  
いひうの思ひ我れを朝日さくも女のふれくけやあふりよ

1-15

一真名伊勢物語云昔男ウチカウラミコナラフヤヤク裏頭而平城京ミ、貞考ミ體源抄云豊原統秋作

豐原  
統我作

用九服曲裏頭樂新樂中曲又作裸頭樂此曲李德祐作又云明帝  
所作云中畧天皇御元服後宴之旨必奏此曲云裏頭的仮名しの比  
よりうゝぬううやとせあううううむ奥義抄云我けはういよ  
そころ花のうとけふふよとよりううういふてとえ





一傳、梅坡卷よりこのこと、右、お茶ごころいふ、あまの巻、貞孝  
情か納言集は古なり、お茶今後撰とつる、你煩集云天原六年  
宣旨ありくともめてすといふ、ふたつ利本並にこれにて  
右、お茶集といひといへども、め給あり、下野國集、又右方お茶中  
よ抄、餘滿抄よりある分の中に世の中にとりてゐるといふこと  
とりてうらむといふ、ゆゑ方お茶より書ふ法補記とある、けし集  
未だ之人称古方お茶集、你煩集より右、お茶の中にとりてゐる、お茶  
新撰万葉集、名官家万葉集等之改歟、と新撰樂記云、此系、五鳥  
尊、聖德太子御世代定三十字、以降古萬葉集、新萬葉集、古今後  
撰拾遺抄諸家集等盡以見たり、こゝに依る所、信長云、万葉歌九卷、一説

正實之撰之説梨葉主人抄に同卷不知撰者爲ば後醍醐撰四卷  
 目の中に不見作りのに撰定のはとてなしてゐるのうに云え  
 らうか多かるやとぬ一とて或抄は源已迄古万葉集とては卷  
 あり神代といふこの分より後醍醐天皇の所撰に負ふ源已の流世  
 古万葉集序といふものよこに世の中よりやあらざるは神  
 世といふもとのこゝに人の分をこゝりて古万葉集と名  
 つけてゐる人もありてかゝるまじりやかの序は事とて  
 あいさのまじりをはかりてしとて和歌の集との分をこゝれ  
 るまじりしれ神代といふこの分は入るがらゐると思ふ  
 古万葉集といふ人の集まる今の万葉集のとて上右の集あれ













扶桑夢記の出来  
 享和二年十月五日  
 佐賀東院十七日  
 米津院十月五日  
 幸井野入至大和  
 宮内入河内山  
 難波十月一日  
 置入京選御養  
 院三

日集辨法はもとめられし人なり  
 水川の舟よりしてさるるに  
 りあははなまかりし  
 秋のまゝ  
 ほろろ  
 まは  
 集正義  
 りあははなまかりし  
 秋のまゝ  
 ほろろ  
 まは

石のつら  
 新友  
 りあははなまかりし  
 秋のまゝ  
 ほろろ  
 まは

一升  
 一升  
 一升

旅の床やふけりて云分の涙のこぼれしれこれと  
よとれぬ時をけりこれの情の寂西の蚊蛇と相  
書るとよとれしれとありて君則ち旅後集其旅後  
思ひよとて東のつよまされりるふかたといふもて  
旅のこぼれしれ旅後成哉捨ててとありよとて旅のこぼれし  
旅の床やふけりて云分の涙のこぼれしれこれと  
よとれぬ時をけりこれの情の寂西の蚊蛇と相  
書るとよとれしれとありて君則ち旅後集其旅後  
思ひよとて東のつよまされりるふかたといふもて  
旅のこぼれしれ旅後成哉捨ててとありよとて旅のこぼれし

三年閏十月廿九日吉祿宣祝部成茂今度依有叛逆與同之疑  
雖招下關東家免許歸洛畢由畧囚人出社頭之後起居

緒朝暮寒祈念利向七社方誦一首歌ス入テス塵ニシル影ハ  
神モ旅子床や露キ下著干開東之翌日入夜右京兆室夢  
想旅つ來干座傍被付鉄鏢也取室家髪纏左右手太有念  
怒之氣覺之後心神爲惘然猶懷則以女房示合大官令禪門  
之殊驚駭而須被免成茂罪過故神道事可從神事且今夜中  
可進發之由相觸成茂首下知重之上所送餘物等也作者部類  
四位部之祝部成茂日吉祿宣大藏大補元仲男  
一係氏父親をさるぬ

よとれぬ時をけりこれの情の寂西の蚊蛇と相  
書るとよとれしれとありて君則ち旅後集其旅後  
思ひよとて東のつよまされりるふかたといふもて  
旅のこぼれしれ旅後成哉捨ててとありよとて旅のこぼれし  
旅の床やふけりて云分の涙のこぼれしれこれと  
よとれぬ時をけりこれの情の寂西の蚊蛇と相  
書るとよとれしれとありて君則ち旅後集其旅後  
思ひよとて東のつよまされりるふかたといふもて  
旅のこぼれしれ旅後成哉捨ててとありよとて旅のこぼれし









天保初、三月、ホナ  
 わりて、いふに、こ  
 りて、いふに、こ  
 國政院、信、後、宮  
 方、鈴、馬、令、也、也  
 山、吹、を、在、居、の  
 う、と、り、を、三、分  
 の、り、れ、二、つ、り、や  
 五、つ、り、一、番、院  
 別、の、り、を、り、か  
 い、の、り、を、り、か  
 と、り、わ、り、か

日かへらうとすふらぬとていふさうに多うとて人のせうがまをいふ  
 てやうかうとくわかりぬら吹のこのうさうといふやうにうさうに  
 えうかりれば一羽のふたつふたつ九まにあつてやうと吹のうさう  
 もといふ人かた。愛國雜誌中云ふ歌院のみとてうさう  
 多て目くらあつてせうりりふふ吹のうさうといふやうに  
 友東実方朝臣にさういふやうに吹のうさうと九まといふ  
 歌うさう集ふといふといふ

104

一 債網を集戯映云々

りかとの<sup>う</sup>ちへとあるいふ<sup>う</sup>ちへえとまつ衣にりりもろ  
糸乳母といふやうも<sup>う</sup>ちのあいのれが<sup>う</sup>ちにとふ<sup>う</sup>ちにおふ<sup>う</sup>ち

らん、算考頭昭は昨ち今集粉云このわと本月へ但けいひの  
は今のわを案としてしてきて、今月といひつきの五案は  
わらじとて同じく本月といふもれや、休ぬ本月の中へ御して  
よめられひきく、はせりその本月とて、まじとて、すく、  
本日漬といひやと

本日漬といふやう

一、本載集雜上云右大將兼長春見の系の上にふまけりとも不察傳  
りて清源公位はゆかりふきくもわがたきとせむゆかりとなくん  
えられい又のRのうにはなりとふしとせむゆかりとせむゆかりのふ  
りてあつらするにあらんのかとせむゆかりとせむゆかりのふ  
た大屋友の中納言中兼長春見の上卿小つらみといふ前馬助

花巻に二子子法蓮といふてあふ志のつれなきぬききか  
 あり一子つれなきとまゝくハ又の目れもあてに花巻も  
 といふあふきのふえ一きふえに流るんかのやとさう  
 あれぬ福井抄中細公太の兼長その春日使とてやい  
 といふ人くもつとれとやとまゝめさるる中より馬助  
 花巻の子法蓮といふなりあてまゝなるなりをわくといえれ  
 八たふ東北の日に花巻ももさきなりとあふねとれ流るん  
 かのやとさうあれぬせのすゑもたふきまゝいときふなり  
 後河原集雜上云右大御兼長とて目おの上にてくもゆり  
 といふ故に花巻といふといふとあてまゝのすゑもたふきぬとて

きせうりきりやあやうきと云ふは又目能強きと云ふれども  
有りてこそと云ふるはあやうき腹きりなりと云ふなり  
より浪はんのやと云ふなりと云ふれども又材料集り  
いかに浪大に胸より云ふなりと云ふなり

— 10 —

一 天下を懐くを欲するのまじからんを憂ふといふまじ

すんばゆきてん頭照にあり 雨の如く是れは神酒  
書よりくくわくハ啓き居し俱知とかり目な紀きなり  
因考散本集をよむに河書は居凡の餘よま山里より人々  
りめて所より小燈小書なりかりとる所とよめりて是れ本集永久  
巳年百き野分は東地後れ朝むとてはんりハゆき

るものなりといふはあらうといふ國集を成集に引いてあり  
と云ふ一なるは是は陳神といふといふと云ふ一（金）此  
かりとみぬらうのやういふ日本書紀卷第十一百濟俗名此鳥曰根  
知下是今時入まふ根知をぬらうといふ名也

一神神松をぬらふといふするといふとわたりをてからといふ一  
さかぬといふといふさかぬといふといふといふといふといふ  
まうといふ松や杖のいふといふといふといふといふといふ  
是は仲実別名まうといふといふのいふといふといふといふ  
ていといふといふ自考散在集を讀むの條にまうといふといふといふ  
といふといふといふといふといふといふといふといふといふ

うは目録をまうといふ人の麻をゆふ時がうといふといふ  
まうといふといふ唐集をゆふといふ時翳をまう麻をゆふといふ  
まうゆふといふ又まう人のいふといふといふといふといふ  
まう人の麻をゆふ時がうといふといふといふといふといふ  
といふ人の麻をゆふといふといふといふといふといふといふ  
てがれはゆふといふ麻をゆふといふのまう麻をゆふといふ  
といふといふ麻をゆふといふといふといふといふといふ  
まうの麻をゆふといふといふといふといふといふといふ  
松の院にゆふ松の中納をゆふといふといふといふといふ  
といふといふといふといふといふといふといふといふ



他言長方にむかひやうするすの小艸の系属するかのこよあや  
そしくは麻草系をかきいふかのまゝに又特をさかしくしと  
以麻爲正流又藏玉と麻のこい(一)但留麻といふより病恒  
未聞云々といふ雌麻といふこいさかと雄麻といふよりいれ  
てさかぬる艸のこいこ人ゆはあうさういふこい(一)のこい  
とハ概押しこいといふ開くこいといふこい

百五

一ほろもまゝ秋のかきハ赤花なりわくこい花と一湯ま

とくくつなれるまゝ赤花より寢敷あつひ或ハ枕たの  
るし白河流ハ小首ハ寢敷よりより下果自考ニ赤花ハ尾云  
枕のまゝね白河あはをねふし又又授取ぬる方花是

古物歸故之故ヤ

百六

一圖書云退凡下赤花卒都段よりハ下赤花内サハ退凡(自考)

古事記云昔為らぬ御祈行ハ講セルニ退凡下衆、卒都段サ  
ノ銘イカ、書タルト問タリケレハ金輪聖王天長地久御願田満  
トコリ書タルト答ケリ



一葉抄之冊は百花庵宗因翁  
の隨筆なり西田忠礼が飛仙  
翁より承けの本をうゑ文化七年の  
秋告を書き添ふ

大草公彌



